

# 地政学研究の課題と文献紹介

高木 彰彦

## 1 はじめに

日本では地政学といった場合、いまだに戦前のドイツ地政学 Geopolitik の強い影響を受けたものを指すことが多く、戦争との関わりにおいて否定的なニュアンスで語られることがしばしばである。一方欧米諸国では 1980 年頃から地政学 geopolitics が国際政治を語る際の流行語となり、地理学においても地政学研究が活性化してきた (Takeuchi 1987, 高木 1991)。さらに批判的地政学 critical geopolitics という伝統的な地政学的理解に挑戦する研究動向もみられるようになってきた<sup>1)</sup>

したがって、日本語で地政学と一口に語られるものの内容はきわめて多様であり、地政学概念とその変遷について交通整理しておく必要がある。その意味では、近年アメリカ及びフランスで地政学辞典が相次いで刊行されたことは時宜を得たものであるといえる<sup>2)</sup>。

そこで本稿では、John O'Loughlin の編集によって 1994 に刊行された *The Dictionary of Geopolitics* の内容紹介を行い、「地理学における経済・社会理論と空間の思想」という共同研究において地政学研究を進めるに当たっての当面の検討課題を指摘するとともに、今日では貴重になっていると思われる戦前の地政学関係の文献のうち、筆者が所有しているもののリストを紹介することにしたい。

## 2 *The Dictionary of Geopolitics* について

### a 概要

本書は編者の他に、Simon Dalby, Henning Heske, Sven Holdar, James Hufferd, Paul La Blotier, Jan Nijman, Patrick O'Sullivan, Gearóid Ó'Tuathail, Geoferey Parker, Neil Smith, の 10 名によって執筆されている。内容は、「目次」、「はじめに」、「辞典」、

「参考文献」、「索引」、「著者一覧」、となっており、取り上げられている項目は全部で 219 項目である。一般の辞典と本書が異なる点は、各項目の分量が通常の辞典よりもかなり長いこと、参考文献が豊富で 8 カ国語で約 600 項目にも及ぶことであろう。一口に地政学といっても、それは国民的にかなり独特の偏りがある (テイラー, 1991)。そうした多様性のなかで、本書では 20 世紀の大国と目される、イギリス、アメリカ、ドイツ、フランス、日本、ブラジル、スウェーデン、イタリア、の 8 カ国が扱われている。この点、ロシア・中国といった世界的な大国が欠如していることは残念である。両国では、地政学がその帝国主義やファシズムとの関連性ゆえに否定されてきた、ことがその理由だと述べられている<sup>3)</sup>。

以下、「はじめに」の部分のを要約することによって、本書で述べられている「地政学の定義」、「時期区分」を述べた後、「辞典」の部分の「日本に関する項目」を簡単に検討する。

### b 地政学の定義

本辞典は、地政学に関する様々な学派の変遷を示すものであるが、同時にハートランド<sup>4)</sup>、モンロー・ドクトリンの原則、汎地域 panregions、自然境界の重要性といった永続的なテーマも扱われている。とはいえ、こうしたテーマからすれば地政学の主題が不明瞭であることは明らかであり、それが地政学研究の足かせとなってきたという。一般に地政学といえば、ハウスホーファー学派に代表されるように、その軍事指向が顕著な特色である。アメリカでも地政学は、戦場、技術、戦術の軍事的研究と密接な関わりを持ってきたため、本辞典も過去と現在の地政学の軍事的強調に関連する項目を含んでいる。

次に、地政学の三種類の定義がなされる。まず、対外政策の地理的次元であり、これには二つのレベルがあるという。すなわち、a. 対外政策のためのデータ

を提供する場所、国民、資源の分布等の背景となる研究と、b. 特定の目的を成就するために空間的に基礎づけられた政策の形成である。たとえば、朝鮮半島の地理に関する研究は前者の例であり、共産主義封じ込めのための戦略の一部として朝鮮半島を位置づける場合は後者の例となる。

第二は応用政治地理学で、これは政治地理学ほど客観的ではなく科学的でもない。こうした地政学的世界観は個々の国の国民的野心にしたがって展開されるため、多様で共通性はほとんどない。これこそが国際政治の手腕としての地政学であり、この点から、それぞれの国の執筆者を選ぶのにもっとも神経を使ったと述べられている。

最後に、通常の地政学に批判的な立場があり、批判的地政学 *critical geopolitics* と呼ばれる。これは社会理論からアプローチするもので、地政学や地政学者の実践の原因、結果、方法、信条を理解するために、大国間の「通俗的な地政学」の裏面を検討する。こうした研究は演説、報告書、条約、記録等のテキストを分析して、地政学の目的を解釈し代替物を提供することを可能にすると述べられる。この批判的地政学にはもう一つの流れであるフランスの *H. Rodoté school* があり、このグループは「地政学という価値ある言葉が国家の安全保障用語になってしまったため、左翼の地政学を代替物として構築する。」(p.viii) ことを目指しているという。

ところで、地政学とは近隣から地球規模まで共通に語られる言葉であり、アメリカにおいては Henry Kissinger が国務長官時代(1969-77)にこの言葉を多用したことから流行するようになったと言われている。今日では、地政学は「政治地理学」に替わるものとされ、「誰が何をどこでどのようにして得るか」に関わる言葉として一般的には定義されている。しかしながら本書では、「国家間の関係ないしは大国間による広大な地域の植民、定住政策」に限定することが強調されている。

### c 地政学の時期区分

ギリシアにおける環境決定論に見られるように、地政学は古代から存在したが、19世紀の帝国主義が直接の起源であり、その点からすれば、地政学の登場はアカデミックな地理学の登場と機を一にしている。それは普仏戦争終了後のドイツにおいてであった。したが

って、地政学、地理学ともに帝国主義と戦争が起源となっているといえ、それ以後の地政学は以下のように4つに時期区分される。

①古典的地政学(1870-1920) : Friedrich Ratzel, Alfred T. Mahan, Halford J. Mackinder, Rudolf Kjellén などが代表的人物で、国家有機体説、ランドパワー対シーパワー、生存空間 *Lebensraum*、ハートランドなどの諸概念が有名である。

②ファシストと反ファシストの地政学(1920-1945) : ドイツの Haushofer が中心的人物で、日本やイタリアでも展開した。そこでは①の時期の諸概念が踏襲され、他方、西側諸国でも「民主的地政学」建設のために同様な主義が用いられたのである。

③アメリカ的地政学(1945-80) : アメリカの地政学理論が卓越した時期で、ソ連からは対抗地政学は出現しなかった。ソ連では地政学はナチの遺産と考えられ拒否されたためである。代表的な概念として封じ込め、ドミノ理論などがあり、初期には Mackinder らの古典的理論が注目されたが、1970年代前半までに、Kissinger や Brzezinski らによってドイツ的地政学概念が一掃され、地球規模の勢力均衡概念に変化した。

④批判的地政学(1980-) : 国家の地政学は世界政治及び世界経済における西洋の支配を促進するものであり、西側の軍事侵略の手先とみなして批判するもので、1980年頃から認められるようになった。地理学者はグローバルな分析とともに古典的地政学を捨て去ったものの、安全保障分野では依然として残存している。

以上のような時期区分が行われた後、地政学は新たな危機によって絶えず変化する分野であるが、古典的地政学の核となる信条は不変のままであること、両者が特定の状況で混合される時に一般的に人気を集めることになることが指摘される。そして最後に、「この分野の初めての辞典である本書が、地政学の本質とそれを繰り返して分裂させてきた論争とを明らかにすることを期待するし、政策立案者が手腕をみせる背景や信条の理解を深めれば、その選択や制約の理解が容易になる」(p.x) と述べられている。

### d 日本に関する項目の検討

ここでは日本の地政学に関連する項目のみ取り上げることとする。本事典の見出し項目 219 のうち、日本に関係すると判断されるものは以下の 10 項目である。「アジア主義 *Asianism*」、「東亜連盟 *East Asiatic*

Union)、「大東亜共栄圏 Great East Asian Co-prosperity Sphere」、「東条英機 Hideki Tojo」、「北一輝 Ikki Kita」、「日本地政学 Japanese Geopolitics」、「日本地政学協会 Japanese Society for Geopolitics」、「協同主義 Pan-Asianism」、「大川周明 Shumei Okawa」、「円ブロック Yen Block」。

これらの項目のうち、大部分は、日本人及び外国人によって行われた政治学ないしは政治史関係のいくつかの研究を参照して執筆されているものの、「日本地政学」及び「日本地政学協会」については、Takeuchi(1980)のみに基づいて執筆されている。このことから日本の地政学に関する研究が日本の内外においていかに少ないかがわかるであろう。したがって、この辞典の中身を充実させるためにも、日本における地政学に関する研究の活性化が急務である。

### 3 当面の検討課題

前章で紹介した 1870 年代以降の地政学の定義及び時期区分を踏まえれば、幅広い視野から、それぞれの地政学の詳細な吟味が必要であることは言うまでもない。特に批判的地政学の展開については研究動向の十分な紹介すらなされていない。したがって、こうした批判的地政学の検討が急務となる。本書の「批判的地政学」の項目(pp.56-58)を見ると、批判的地政学とは「一般的には、国際的な政治地理学が復活した 1980 年代に発達した数多くの地政学のアプローチのことをいい、さまざまな理論的立場から、批判的な学者たちが伝統的な地政学理解に挑戦してきた」とある。こうしたアプローチには、「過去の事実や地理の誤りの是正」に始まり、「国益や勢力均衡といった単純な関心からは距離をおいた多様な観点からの地政学への取り組み」や「世界システム論的アプローチ」、さらには「国際関係論における批判的およびポストモダンのアプローチ」まで多様な理論的アプローチがあるという。さしあたって、こうしたさまざまな理論的アプローチの十分な検討が必要である。また、戦前の日本の地政学の性格についてはかなり明らかにされてきているものの(竹内, 1974, 1986; Takeuchi, 1980, 1994; 福嶋, 1991)、こうした研究は事実関係を明らかにすることに主眼がおかれており(竹内, 1974)、地政学の背景にある社会的コンテキストや思想的背景等への言及は十分ではない<sup>9)</sup>。

先にも述べたように、日本の地理学においては辞典のソースとなる地政学研究自体が不足している。とはいえ、辞典では「東亜連盟」や「大東亜共栄圏」といった項目が取り上げられており、そうした構想の背後にある急進的ファシズムを展開した「大川周明」や「北一輝」あるいは「近衛文麿」にも言及していることから明らかなように、地理学にとどまらない広がりを見せているのである。したがって、今後こうした思想的背景や社会的コンテキストを踏まえた研究が必要であり、また、運動としての地政学が社会的コンテキストの中でどの程度意味を持ち得たのかも見ていく必要がある。先にも触れたように地政学の特徴は民族的偏りが顕著に見られることである。こうした考察を行うことにより、日本の地政学に見られる民族的特色に迫ることができると思われる。

たとえば、筆者は戦前期の地理学評論を例に、論文の傾向がどの程度変化したのかを検討したことがあるが<sup>9)</sup>、結果は変わらずであった。これは同様な試みを行った Heske(1986)とは対照的な結果であった。とはいえ、アカデミズム以外の媒体においては異なる傾向が見られるかもしれない、さしあたっては、『地理学』や『改造』、『中央公論』等の雑誌を検討してみる必要があるだろう。その際、上述した批判的地政学のアプローチのうち、ポストモダンのアプローチが有効となるかもしれない。今なお過去の遺産を引きずり続けている日本の地政学に対してこそ、こうした批判的地政学のアプローチが必要なものであり、戦前期の地政学の展開について既往の研究を踏まえて、より広いコンテキストで検討してみることを当面の課題としたい。

最後に他の研究者への便宜を図るために筆者が所有している地政学関係の文献リスト(戦前期のもののみ)を以下に掲げる。これらは、科学ベン(井関弘太郎名古屋大学名誉教授からいただいたもの)を除いて、故松井武敏名古屋大学名誉教授からいただいたものであることを付記しておきたい。なお、文献名の一部は新字体に改めてある。

#### 戦前の地政学関係文献

- 阿部市五郎(1933):『地政治学入門』,古今書院,218p.  
阿部市五郎(1941):地政治学の史的発展,科学ベン,6,9,

- 55-59.
- 飯塚浩二(1942):『ゲオポリティクの基本的性格, 経済学論集 12-8, 13-3,5(筆写によるもの)』.
- 飯本信之(1929):『政治地理学』, 改造社, 444p.
- 井口一郎(1943):『地政動態論』, 帝國書院, 339p.
- 岩田孝三(1943):『国防地政学』, 帝國書院, 425p.
- クルト・ヴィールスビツキ, 井波越次訳(1941):『東南アジア地政治学—白色・赤色・黄色間の将来の戦場—』, 科学主義工業社, 151p.
- 江澤譲爾(1941):『ハウスホーファーの太平洋地政学』, ラジオ新書 54, 日本放送出版協会, 191p.
- 江澤譲爾(1941):地政学上の空間概念, 科学ペン, 6, 9, 38-43.
- 江澤譲爾(1942):『地政学研究』, 日本評論社, 320+25p.
- 江澤譲爾(1943):『地政学概論』, 日本評論社, 185p.
- 江澤譲爾, 國松久訳, 佐藤弘(1944):『国防地政学』, 叡松堂書店, 344p.
- 金生喜造(1940):『欧州の現勢—戦局の展開と地政学—』, 古今書院, 366p. 2冊.
- 金生喜造(1941):国境論, 科学ペン, 6, 9, 60-74.
- 金生喜造(1942):『国境論』, 日新書院, 342p.
- 金生喜造(1943):『大東亞地政学と青年』, 潮文閣, 265p.
- 企画院研究会(1943):『大東亞国土計画』, 同盟通信社, 141p.
- 国松久弥(1941):政治地理学と地政治学, 科学ペン, 6, 9, 50-54.
- 國松久弥(1942):『地政学とは何か』, 柘谷書院, 164p.
- 黒田覚(1941):『国防國家の理論』, 弘文堂書房, 285p.
- 小牧實繁(1940):『日本地政学宣言』, 弘文堂書房, 211p.
- 小牧實繁(1941):日本地政学の課題, 科学ペン, 6, 9, 38-43.
- 小牧實繁(1942a):『東亞の地政学』, 東洋文化叢書, 目黒出版, 100p. 2冊.
- 小牧實繁(1942b):『地政学上より見たる大東亞』, ラジオ新書 96, 日本放送出版協会, 134p.
- 小牧實繁(1942c):『日本地政学』, 大日本雄弁会講談社, 276p.
- 小牧實繁(1942d):『続日本地政学宣言』, 白揚社, 223p.
- 小牧實繁(1943):『大東亞地政学新論』, 星野書店, 350p.
- 小牧實繁(1944a):『日本地政学覚書』, 秋田屋, 273p.
- 小牧實繁(1944b):『世界新秩序建設と地政学』, 旺文社, 328p.
- 佐藤莊一郎(1944):『ハウスホーファーの太平洋地政学解説』, 太平洋協会, 183p. 2冊.
- 佐藤弘(1939):『政治地理学概論』, 柘谷書院, 353p.
- ヨハネス・シュトイェ, 渡邊義晴訳(1941):『アウタルキーと地政治学—ドイツ封鎖経済論—』, 科学主義工業社, 259p.
- アレキサンドル・ズーバン著, 阿部市五郎訳(1933):『政治地理学綱要』, 古今書院, 369p.
- 田間耕一(1941):海洋論, 科学ペン, 6, 9, 75-79.
- ルドルフ・チェレーン著, 阿部市五郎訳(1936):『生活形態としての國家』, 叢文閣, 300p.
- ルドルフ・チェレーン著, 阿部市五郎訳(1941):『地政治学論』, 科学主義工業社, 113p.
- ルドルフ・チェレーン著, 金生喜造(1942):『領土・民族・國家』, 三省堂, 292p.
- ニーダーマイヤー著, 大澤峯雄訳(1942):『国防政治学』, 理想社, 285p.
- カルル・ハウスホーファー著, 日本青年外交協会研究部訳(1940):『太平洋地政治学—地理歴史相互関係の研究—(上・下)』, 日本青年外交協会出版部, 520p.
- カール・ハウスホーファー, 石島榮・木村太郎訳編(1941a):『大東亞地政治学』, 投資経済社, 303p.
- カール・ハウスホーファー, 土方定一・坂本徳松訳(1941b):『地政治学入門』, 新世代叢書 12, 育成社, 143p.
- ハウスホーファー著, 若井林一訳(1942a):『大日本』, 洛陽書院, 417p.
- ハウスホーファー編著, 若井林一訳(1942b):『生命圏と世界観』, 博文館, 274p.
- ハウスホーファー著, 太平洋協会訳(1942c):『太平洋地政学』, 岩波書店, 589+51p.
- ハウスホーファー著, 佐々木能理男訳(1943a):『日本』, 第一書房, 345p.
- ハウスホーファー著, 窪井義道訳(1943b):『大陸政治と海洋政治』, 大鵬社, 235p.
- ジークフリート・バツサルグ, 高山洋吉訳(1942):『大東亞地理民族学』, 地平社, 302p.
- ハウスホーファー, マウル著, 玉城肇訳(1941):『地政治学の基礎理論』, 科学主義工業社, 236p.
- ワルター・ハール著, 千葉秀雄訳(1939):『世界政治地図』, 清和書店, 237p.
- ベルリン海洋学研究所編, 田間耕一(1943):『海洋国防地理』, 山雅房,
- 前田虎一郎(1943):『地政学的國家の興亡』, 二松堂, 233p.
- 松川二郎(1941):『中西アジア地政治誌』, 新興社出版部, 486p.
- 松川二郎(1942):『大東亞地政学』, 霞ヶ関書房, 438p.
- ヨーゼフ・メルツ著, 田間耕一訳(1941):『海洋地政治学—民族と制海権—』, 科学主義工業社, 157p.
- 米倉二郎(1941):『東亞地政学序説』, 生活社, 226p.
- 飯本信之・佐藤 弘編(1942):『南洋地理大系第1巻—南洋総論—』, ダイヤモンド社, 338p.
- 飯本信之・佐藤 弘編(1942):『南洋地理大系第2巻—海南島・フィリッピン・内南洋—』, ダイヤモンド社, 404p.
- 飯本信之・佐藤 弘編(1942):『南洋地理大系第3巻—タイ・仏印—』, ダイヤモンド社, 394p.
- 飯本信之・佐藤 弘編(1942):『南洋地理大系第4巻—マレー・ビルマ—』, ダイヤモンド社, 429p.
- 飯本信之・佐藤 弘編(1942):『南洋地理大系第5巻—東印度

- I(旧葡印(1))-, ダイアモンド社, 362p.  
 飯本信之・佐藤 弘編(1942):『南洋地理大系第6巻-東印度  
 II(旧葡印(2)・旧英領ボルネオ・葡領チモール)-, ダイア  
 モンド社, 421p.  
 飯本信之・佐藤 弘編(1942):『南洋地理大系第7巻-印度・  
 セイロン-, ダイアモンド社, 410p.  
 飯本信之・佐藤 弘編(1942):『南洋地理大系第8巻-豪州・  
 ニュージーランド・太平洋諸島-, ダイアモンド社, 386p.  
 満鉄東亜経済調査局編(1937):『南洋叢書第1巻-葡領東印度  
 篇-, 満鉄東亜経済調査局, 506p.  
 満鉄東亜経済調査局編(1941):『南洋叢書第2巻-改訂仏領印  
 度支那篇-, 満鉄東亜経済調査局, 887p.  
 満鉄東亜経済調査局編(1938):『南洋叢書第3巻-英領マレー  
 篇-, 東亜経済調査局, 330p.  
 満鉄東亜経済調査局編(1938):『南洋叢書第4巻-シヤム篇  
 -, 東亜経済調査局, 630p.  
 満鉄東亜経済調査局編(1937):『南洋叢書第5巻-比律賓篇  
 -, 慶應書房, 516p.  
 室賀信夫(1941):『世界地理政治大系・3-印度支那-, 白  
 揚社, 309p.  
 別枝篤彦(1941):『世界地理政治大系・4-葡領印度-, 白  
 揚社, 241p.  
 野間三郎(1942):『世界地理政治大系-土耳其, シリヤ, パレ  
 スチナ, トランス・ヨルダン-, 白揚社, 268p.  
 浅井得一(1942):『世界地理政治大系-印度-, 白揚社, 281p.  
 小牧實繁, 川上喜代四(1942):『世界地理政治大系-北極と南  
 極-, 白揚社, 181p.  
 米倉二郎(1944):『世界地理政治大系-滿州・支那-, 白揚  
 社, 395p.

「地政学」1-1(1942, 1)~3-8・9(1944, 11), 日本地政学協会.

- Vol.1-1 上田武松「機関誌『地政学』の使命」  
 論説: 神川彦松「世界新秩序と大地域主義」  
 石橋五郎「地政学の発達とその職能」  
 井口五郎「印度・太平洋ルートの地政学的観点」  
 飯本信之「土着民及び土着国家主義-(豪亜地中及  
 びその陸環の地政学的研究)-」  
 植田捷雄「日・米英開戦と上海租界」  
 松下正寿「パナマ運河の地政学的考察(1)」  
 図説地政学: 飯本信之「西太平洋における華僑の  
 分布」「日本並びに合衆国の領域成長」  
 現地報告: 田中 薫「海南島開発の意義」  
 随筆: 佐藤 弘  
 東亜の地誌: 飯本信之「英領マレー」  
 地方研究: 小林重幸「人口減少地域に関する研究  
 (1)」  
 時事問題, 地政学教室(質疑応答), 新刊紹介,

日本地政学協会発会式記事,  
 地方研究論文投稿規定。

(スペースの都合上以下省略する)

## 注

- 1)ここでは、*Society and Space* 誌が12巻5号(1994)で批判的  
 地政学の特長をくんでいることのみを指摘し、研究動向の  
 検討については今後の課題に含めたい。
- 2)フランスの地政学辞典はLacoste(1993)のことで、これにつ  
 いては地理学評論に柴田(1994)による書評がある。
- 3)もつともすべての国が固有の対外政策をもつという幅広い  
 意味で地政学を理解するならば、恐らく両国においても何  
 らかの地政学は存在するはずであり、ゲオポリティクない  
 しはジオポリティックスという枠組みで体系づけられてい  
 ないだけのことかもしれない。
- 4)ごく最近、社会的コンテキストや思想的背景にも言及した  
 研究が見られるようになってきた。たとえば、  
 Fukushima(1996)やTakeuchi(1994)がそうである。
- 5)これについては、1993年8月30日~9月3日に東京で開催  
 された、IGU(国際地理学連合)のコミッション World  
 Political Map の会議、'The Asia-Pacific and Global  
 Geopolitical Change' で 'Political geography and geopolitics  
 in Japan' と題して報告した。

## 文献

- 柴田匡平(1994): (書評)「Y. ラコスト監修: 地政学辞典」,  
 地理学評論, 67A, 483-484.  
 高木彰彦(1991): 「世界システム論と政治地理学の新たな展  
 開」, 地理学評論, 64A, 839-858.  
 高木彰彦(1993): 「地政学に関する覚書-地政学概念の変遷を  
 めぐって-」, 茨城大学教養部紀要 25, 395-407.  
 竹内啓一(1974): 「日本におけるゲオポリティクと地理学」『一  
 橋論叢』第72巻第2号。  
 竹内啓一(1987): 「ゲオポリティクの復活と政治地理学の新し  
 い展開-ゲオポリティク再々考-, 『一橋論叢』96巻。  
 テイラー, P.J., 高木彰彦訳(1991): 『世界システムの政治地  
 理(上)』, 大明堂,  
 57-125. Taylor, P. J.: *Political geography-world-economy,  
 nation-state and locality* -, 2nd ed., Longman, London, 42-  
 90.  
 福島依子(1991): 「地理学の方法論的反省と地政学」, お茶の  
 水地理, 32, 1-8.  
 Fukushima, Y. "What is the real legacy of the past?-  
 Japanese geopolitics and its background-". *Political Ge-  
 ography*(forthcoming).

- Heske, H. (1986): German geographic research in the Nazi period. *Political Geography Quarterly*, 5, 267-82.
- Lacoste Yves ed. (1993): *Dictionnaire de Géopolitique*. Flammarion, Paris, 1680p.
- O'Loughlin, J. ed. (1994): *Dictionary of Geopolitics*. Greenwood Press, Westport and London, 284p.
- Takeuchi, K. "Geopolitics and geography in Japan reexamined", *Hitotsubashi Journal of Social Studies* 12, 1980.
- Takeuchi, K. (1994): The Japanese imperial tradition, western imperialism and modern Japanese geography, in Anne Godlewska and Neil Smith eds.: *Geography and Empire*. pp.188-206, Blackwell, Oxford & Cambridge.